

# ベリンググキャット

結城 洋一郎

NHKは今年六月四日、「デジタルハンター」謎のネット調査集団を追う」という自社制作番組を再放送した（初回は昨年五月十七日、YouTubeで閲覧可能）。しかし、これはドキュメンタリーとは名ばかりのプロパガンダ番組である。

この「調査集団」というのは、二〇一四年に、エリオット・ヒギンズ (Eliot Higgins) という当時三五歳の「コンピュータ・ゲーム・オタク」の無職のイギリス青年が、たった一人で立ち上げた（ということになっている）「ベリンググキャット (Bellingcat)」という名のブログのことで、その目的は、本人によれば、ゲームで磨いたスキルを用いて、「一般に公開された膨大な情報を分析して隠された真実を暴き出すこと」なのだそうである。

こうした手法は現在、「オープン・ソース・インヴェステイション」という大層な名の下に、「ネット時代の革命的な新手法」などと称揚されているのだが、実際はこうした分析手法は昔からあって、かつて一橋大や北大の一部研究者は、様々な公開情報を分析統合して、ソ連の経済や軍事予算の隠れた実態などを割り出していたのだという。

また今や、SNS上の情報を繋ぎ合わせる

ことで私たちの個人情報もあれば全て集積可能と言われ、これまでもネット民たちは論文や意匠の剽窃を摘発してきたし、近頃はイジメ等の犯人を特定すべく日々ネットに向かう者たちがいることも衆知の事実である。

さて、「ベリンググキャット」について真に語られるべきは、この集団は英国やNATOなど西側情報機関のタミーに過ぎないのではないかとの疑惑である。

エリオット・ヒギンズはこのブログを立ち上げる前は主としてシリア問題を扱っていた。当時、ツイッター上にはハンドル名を「Shamir Witness」（シリアの証人）という「ジャーナリストのエキスパート」と噂される人物がいて、イスラム過激派の活動状況や斬首映像、さらにはISへの参加方法などの内部情報を掲載して組織へのリクルート役を果たしており、ヒギンズは自分のブログの読者をこのサイトへ誘導することで一役買っていた。

実はその人物は単なるタミーの素人インド青年で二〇一四年に逮捕され、ヒギンズは同年七月一日に「ベリンググキャット」を立ち上げて活動の拠点をこちらに移す。これはウクライナでマレーシア航空一七便が撃墜されるわずか三日前のことで、彼は早速、「ロシア

ア側による撃墜説」拡散の中心的存在となるのである。もつとも、彼の主張にはその都度、詳細な反証が出されているのだが、NHKはこうしたことには全く触れていない。以後、ヒギンズは国家機関しか持ちえないようなセンシティブ情報をまじえながら反ロシア・反中国キャンペーンを続けているが、ではその情報源は何処なのだろうか。

当初から、彼のブログは西側情報機関の資金援助の下に運営されていると言われていた。彼はこれを単なる「陰謀論」と一蹴してきたのだが、今や彼は、欧米政府から「間接的に」財政支援を受けつつ英国情報機関とコンソーシアムを組み、自身はNATO系の委員を務めていることを認めている。

また、今年四月二一日に「Mint Press」に掲載されたアラン・マクラウド氏の記事によれば、彼の集団のスタッフには、かつての英陸軍将校、米空挺師団軍人、「英国政府通信本部」、「外務英連邦省」、「米国家地理空間情報局」、「ホワイトハウス軍事事務局」等々の情報・軍事関係元職員が多数含まれ、ここを経由して「ニューヨークタイムズ」などの記者に転身する者も複数存在するという（一種のキャリアロンダリングである）。

NHKはこうした事実には一切口を閉ざしつつこの集団をほめちぎっている。してみれば、同局の関係者もまた、情報工作機関「インテグリティ・イニシアチブ」（拙稿、本誌第六〇六号一頁参照）に包摂された国際クラスターの一員なのだろうか。

ハゆうき よういちろう・小樽商科大学名誉教授